様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０４３１

研究課題名（和文）災害表象とドキュメンタリー表現の変容――都市・環境・テクノロジーの政治学と倫理

研究課題名（英文）Representations of Disaster and Transition of Documentary: Cultural Politics and Ethics about Environments

研究代表者
中垣　恒太郎（Nakagaki, Kotaro）

大東文化大学・経済学部・教授

研究者番号：８０３５０３９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：ドキュメンタリー／記録映画を素材に、災害表象の変遷を辿ることにより、映像表現がいかに発展してきたのかを考察した。ドキュメンタリーに対する概念が問い直され、作り手の「主観」や被写体や作品に対する「倫理」の問題に対する意識について議論が高まる中で、新たな「災害」を「表象」するドキュメンタリー作品が今現在どのように生成されつつあり、過去の作品がどのように再評価されつつあるのかを吟味することにより、「メディア」、「ジャンル」の概念それ自体までをも再検討することができる。作り手による「主観」の問題、対象に対する表現者の「倫理」の問題、災害により顕在化する「都市・環境・テクノロジー」の問題にも目を向けた。

研究成果の概要（英文）：This research project examined how we can continue to narrate and pass down legacies of disaster representations including 311 to the next generation. Documentaries can convey historical records, sights, and cultural atmospheres to others. Via documentary works, people living in foreign countries and even other times can learn a great deal and exchange information, ideas, and opinions. Nowadays, throughout Japan, except for certain disaster areas, people carry on with their daily lives, but many still suffer from the disaster and have lost their homes and communities forever. Documentary works of disaster representations are needed to remind us of these facts and record these situations for posterity. Furthermore, ethical issues concerning the recording of disasters and disaster victims and documenting the facts are directly connected with redefining the role of documentary filmmaking.

研究分野：比較メディア文化

キーワード：災害表象　ドキュメンタリー　都市　環境　テクノロジー　メディア　倫理　共生

１．研究開始当初の背景

本研究課題は、「災害表象」を通して、ドキュメンタリー映像作品の本質に迫ることを本研究課題の第一の目的として設定する。

付随して、映画監督の森達也らによる『311』（2012）が提起したように、ドキュメンタリー表現の作り手による「主観」の問題、対象に対する表現者の「倫理」の問題、メディア・リテラシーの問題にも目を向ける。1989 年以降、２年毎の頻度で開催されている山形国際ドキュメンタリー映画祭においても、第 13 回となる 2013 年の映画祭の特集として、「6 つの眼差しと〈倫理マシーン〉」と題し、東日本大震災の映像記録と倫理をめぐる特集上映と討議が行われている。

さらに同映画祭では、特集上映「ともにある Cinema with Us 2013」においては、東日本大震災「以後」をめぐるドキュメンタリー作品の中から 15 作品を選定し、震災「以後」の時代に生きる「日常／非日常」のあり方（の変化と変わらなかったこと）に目を向けている。中長期的視点により、人々や土地、地域に密着することで、一時的な風潮や流行に留まらず、結論を急ぐことなく、じっくりと対象を掘り下げていくことができるのもドキュメンタリー映画作品の主たる特徴の一つである。

近年のドキュメンタリー表現に対する意識の変容を踏まえた上で、今現在、新たにどのような「災害」「以後」の作品が生み出されつつあるのかに対しても留意したい。私たちの世界や社会のあり方に対して、別の角度から見る視点を投げかけてくれるドキュメンタリー映像作品が、はたして現在の私たちを取り巻く世界に対してどのような力を持ちうるのか、その潜在的な役割についても考察する。

２．研究の目的

本研究課題では、とりわけドキュメンタリー映画における「災害表象」に注目することにより、災害をめぐる表象がどのように映像表現の発展に影響を及ぼしてきたのか、また、同時にどのような問題を抱えてきたのかを、比較文学、エコクリティシズム研究、表象文化論研究などの方法論に基づきながら、具体的な作品分析を軸に考察することを目指す。

ドキュメンタリーに対する概念が問い直され、作り手の「主観」や被写体や作品に対する「倫理」の問題に対する意識について議論が高まる中で、新たな「災害」を「表象」するドキュメンタリー作品が今現在どのように生成されつつあり、過去の作品がどのように再評価されつつあるのかを吟味することにより、「映画」という表現「メディア」、ドキュメンタリーという表現「ジャンル」の概念それ自体までをも再検討することができるのではないか。さらに、「災害表象」をめぐる作品の特徴として、時代や国、文化が異なる世界を「繋ぐ」役割も見過ごすことができない。作品を通じて「共に考える」機会を提供することができる「災害表象」をめぐる作品の社会的役割についても検討する。

（１）今現在のドキュメンタリー表現を取り巻く状況を確認し、最新の理論や新たに生成されつつある作品などを分析・検討することにより、今現在の私たちを取り巻く世界の問題点を検討することができる。「災害」は概して、私たちの世界が人種差別や貧困層の階級問題を内包している事実を顕在化させるものであり、人種･階級の問題を含む環境正義、環境人種差別主義の観点から、日本および英米をはじめとするドキュメンタリー表現について検討する。

（２）今日のドキュメンタリー表現をめぐる「倫理」の問題、ドキュメンタリーを取り巻く概念の再定義をめぐる動向、メディア・リテラシーの問題などを考える。

（３）「災害表象」をめぐるドキュメンタリー作品を通史的に概観・検討することにより、映像表現技術の発展史および各時代における「ドキュメンタリー観の変遷」を探る。

「災害表象」をめぐる想像力が自然災害やテクノロジーに潜む闇や問題点をどのように分析・想定し、自然・環境・テクノロジーの諸問題に警鐘を鳴らしてきたのかを、具体的な作品を素材に比較文化の見地から分析することにより、都市・文明論、自然・環境に対する捉え方が顕在化してくる。エコクリティシズム批評による環境人種差別主義などの観点から、災害のモチーフや物語を再検討することにより、現代社会に生きる私たちを取り巻いている自然・環境・テクノロジーの政治学の問題が見えてくる。災害表象をめぐる想像力の系譜を捉え直すことにより、「以後」の世界をよりよく生きていくために必要な、「災害表象文学の想像力」を提唱する。

３．研究の方法

東日本大震災および原発事故が発生した「311」以後の世界のあり方を様々な角度から捉え直す動きが進んでいる。本研究課題は、こうした現代文明を問い直す流れを受けて、日本・アメリカを中心とする「災害表象」を比較文学、エコクリティシズム研究、表象文化論研究の観点から分析することにより、「都市･環境･テクノロジーの政治学と倫理」の問題に対する分析を試みる。

「災害表象」にまつわる「リサーチ（フィールドワーク含む）／アーカイブ構築」構築、他の研究者との情報交換を密に行うことを意識する。学会のシンポジウムやワークショップに積極的に関与し、新たな研究プロジェクトとして、各種学会でのシンポジウム発題

や共同研究の可能性を探る。学際性を特に重視する。

４．研究成果

ドキュメンタリー／記録映画を素材に、災害表象の変遷を辿ることにより、映像表現がいかに発展してきたのかを考察した。ドキュメンタリーに対する概念が問い直され、作り手の「主観」や被写体や作品に対する「倫理」の問題に対する意識について議論が高まる中で、新たな「災害」を「表象」するドキュメンタリー作品が今現在どのように生成されつつあり、過去の作品がどのように再評価されつつあるのかを吟味することにより、「メディア」、「ジャンル」の概念それ自体までをも再検討することができる。作り手による「主観」の問題、対象に対する表現者の「倫理」の問題、災害により顕在化する「都市・環境・テクノロジー」の問題にも目を向けた。

比較文学、エコクリティシズム研究、表象文化論研究などの方法論に基づきながら、具体的な作品分析を軸に考察し、国内外の各種学会にて研究発表を行った。さらにその集積を単著（『エコクリティシズムで読み解く日米大衆文化――ポスト工業化社会における核・ジャンク・廃墟の想像力』、2017 年度刊行予定）にまとめている段階にある。

さらに、「災害表象」をめぐる作品の特徴として、時代や国、文化が異なる世界を「繋ぐ」役割も見過ごすことができない。作品を通じて「共に考える」機会を提供することができる「災害表象」をめぐる作品の社会的役割についても提唱した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

１．中垣恒太郎「バレエ版『トム・ソーヤーの冒険」『マーク・トウェイン――研究と批評』第 15 号（2016 年４月）112-114 頁。

２．中垣恒太郎「チャップリンと 1910 年代アメリカ――『放浪者』像の生成」『アメリカ文学』（日本アメリカ文学会東京支部会）第 76 号（2015 年６月）27-37 頁。

３．中垣恒太郎「米国における女性オルタナティヴ・コミックスの歴史的展開――グラフィック・ノベルの新潮流」『国際マンガ研究』（京都国際マンガ研究センター）第５号（2015 年５月）39-60 頁。

〔学会発表〕（計 27 件）

１．中垣恒太郎「パンデミック SF 映画における『感染』の□化・政治学」、2016 年 11 月 26 日（於・大阪大学／大阪府豊中市）、日本映画学会第 12 回大会シンポジウム。

２．中垣恒太郎「医療ナラティヴにおける物語の想像力の可能性――グローバル化する医療現場の諸問題と共感力」、2016 年 7 月３日（於・東京藝術大学／東京都台東区）、カルチュラル・スタディーズ学会（Cultural Typhoon2016）。

３．中垣恒太郎 “Shōjo Genso and Role Models for Post-War Japanese Girls and Beyond: The Cultural Reception of Anne of Green Gables in Japan.” 2016 年 6 月 24 日（於・プリンスエドワード島大学／カナダ・ニューブランズウィック州）、国際モンゴメリ学会（L. M. Montgomery and Gender）。

４．中垣恒太郎「映画シリーズとしての『ハリー・ポッター』――映画文化論／ファン・カルチャーの視点から」、2016 年６月 19 日（於・専修大学／神奈川県川崎市）、専修大学文学部 50 周年記念シンポジウム。

５．中垣恒太郎 “Get Your Kicks on Route 66”: Cultural Legacy of Steinbeck’s Hobo Images in American Popular Culture.” 2016 年 5 月 5 日（於・カリフォルニア大学サンノゼ校／米国カリフォルニア州）、国際スタインベック学会（Steinbeck as an International Writer）。

６．中垣恒太郎 ”Adolescence in Japanese Teen Film Movement: Cultural Tendencies of the 1980s and Comparative Approach toward Teen Film Genre.” 2016 年 3 月 24 日（於・シアトル・マリオットホテル／米国ワシントン州）、第 46 回ポピュラー・カルチャー学会（46th Annual PCA/ACA Conference）。

７．中垣恒太郎「モキュメンタリー表現の現在」、2015 年 11 月 28 日（於・専修大学／東京都千代田区）、第 2 回ドキュメンタリードラマ研究会。

８．中垣恒太郎「大衆文化における Thoreau 像の変遷――哲学者・詩人としての『ホーボー』像の再創造」、2015 年 11 月 8 日（於・宮城学院女子大学／宮城県仙台市）、日本英文学会東北支部第 70 回大会シンポジウム。

９．中垣恒太郎「探偵小説の英学受容」、2015 年 10 月 25 日（於・拓殖大学／東京都文京区）、日本英学史学会第 52 回全国大会。

10．中垣恒太郎 「洪水のあとで――『災害文学』として読む *If I Forget Thee, Jerusalem* (1939)」、2015 年 9 月 19 日（於・東北大学／宮城県仙台市）日本アメリカ文学会東北支部 9 月例会シンポジウム。

11. 中垣恒太郎 “Musicals in Promoting Japanese Culture: Challenges of the Global Content Business beyond Cultural/Language Barriers.” 2015 年 9 月 4 日（於・ニューヨーク市立大学バルーク校／

米国ニューヨーク州)、アメリカ地理言語学会(The American Society of Geolinguistics)。
12. 中垣恒太郎「人工知能とポスト・ヒューマン」、2015 年 8 月 29 日(於・米子コンベンションセンター/鳥取県米子市)、第 54 回 SF 大会。
13. 中垣恒太郎 "Reframing Tramp/Hobo Images in Mark Twain's Narratives." 2015 年 7 月 22 日(於・マーク・トウェイン・ボーイフッド・ミュージアム/米国ミズーリ州)、国際マーク・トウェイン学会(Mark Twain's Hannibal: The Clemens Conference)。
14. 中垣恒太郎「男の子向けアニメーションの日米比較――『ベイマックス』と『大長編ドラえもん』シリーズ」、2015 年 6 月 14 日(於・横浜国立大学/神奈川県横浜市)、日本アニメーション学会第 17 回全国大会。
15. 中垣恒太郎 "Adolescence in the New Teen Film Movement: Shinji Sōmai, Nobuhiko Obayashi, and Cultural Tendencies of the 1980s." 2015 年 6 月 6 日(於・ゲーテ大学/ドイツ・フランクフルト)、キネマクラブ(国際日本映画学会/Frankfurt Kinema Club X Nippon Connection)。
16. 中垣恒太郎「災害表象とドキュメンタリー表現の変遷――都市・環境・テクノロジーの政治学と倫理」、2015 年 5 月 31 日(京都造形芸術大学/京都府京都市)、日本映像学会第 41 回全国大会。
17. 中垣恒太郎 "Sexual Issues of Aging Women: Shungiku Uchida and Challenges in Women's Manga." 2015 年 1 月 23 日(於・アテネオ・デ・マニラ大学/フィリピン、マニラ)、第 15 回アテネオ・デ・マニラ大学国際日本研究学会/第 6 回女性マンガ学会(Manga and the Manga-esque: New Perspectives to a Global Culture: 15th Annual International Conference on Japanese Studies and the 6th Women's Manga Conference)。
18. 中垣恒太郎「チャップリンと 1910 年代アメリカ――『放浪者』像の生成」、2014 年 12 月 13 日(於・慶應義塾大学/東京都港区)、日本アメリカ文学会東京支部 12 月月例会シンポジウム。
19. 中垣恒太郎 "Challenges of Representing 311: Ethical Issues and Disaster Tourism." 2014 年 11 月 22 日(於・名桜大学/沖縄県名護市)、国際文学環境学会(2014 International Symposium on Literature and Environment in East Asia)。
20. 中垣恒太郎 "Hobo's Lullaby: The Imagination of "Hobo" and the Cultural Legacy of *The Grapes of Wrath* in American Popular Culture." 2014 年 11 月 7 日(於・カリフォルニア大学ベイカーズフィールド校/米国カリフォルニア州)、国際ジョン・スタインベック学会(The Cultural Legacy of *The Grapes of Wrath*)。
21. 中垣恒太郎 "The Ethical and Philosophical Challenges of George Akiyama: Ashura, *Zeni Geba*, and Cultural Manga History in the 1970s." 2014 年 11 月 2 日(於・ウロンゴン大学/オーストラリア・ニューサウスウェールズ州)、第 6 回国際マンガ研究会議(Manga Futures: 6th International Scholarly Conference)。
22. 中垣恒太郎「冒険小説の英学受容」、2014 年 10 月 19 日(於・福井大学/福井県福井市)、日本英学史学会第 51 回全国大会。
23. 中垣恒太郎「『他者』の映像記録を物語化することはいかにして可能か?――ローカリティ/ジェンダー/映像人類学の観点から『物語』の可能性を展望する」、2014 年 7 月 29 日(於・国際基督教大学/東京都三鷹市)、カルチュラル・スタディーズ学会(Cultural Typhoon 2014)。
24. 中垣恒太郎「アメリカ SF 映画における近未来像――ユートピア/ディストピア社会」、2014 年 7 月 19 日(於・つくば国際会議場/茨城県つくば市)、第 53 回日本 SF 大会。
25. 中垣恒太郎「西部イメージの想像力――スタインベック映画におけるカリフォルニア表象」、2014 年 5 月 26 日(於・藤女子大学/北海道札幌市)、日本ジョン・スタインベック協会第 38 回全国大会シンポジウム。
26. 中垣恒太郎「アメリカ作家における「イタリア」表象――ナショナリズム/ツーリズムの眼差し」、2014 年 5 月 23 日(於・北海道立道民活動センター/北海道札幌市)、日本ナサニエル・ホーソーン協会第 33 回全国大会シンポジウム。
27. 中垣恒太郎 "How Can Documentary Filmmakers Face Natural Disasters? Representations of 311 and Japanese Filmmakers' Challenges." 2014 年 4 月 19 日(於・シカゴ・マリオットホテル/米国イリノイ州)、第 44 回ポピュラー・カルチャー学会(44th Annual PCA/ACA Conference)。

〔図書〕(計 7 件)
1. 中垣恒太郎(単著)『エコクリティシズムで読み解く日米大衆文化――ポスト工業化社会における核・ジャンク・廃墟の想像力』(英宝社、2018 年 3 月刊行予定)、300 頁、編集中。
2. 中垣恒太郎(分担執筆)「冷戦期のチャップリン――『発禁』作品としての『ニューヨークの王様』と『アメリカの嘆き』のレトリック」『英米文学にみる検閲と発禁』英米

文化学会編（彩流社、2016 年 7 月）、239-262 頁。
３．中垣恒太郎（共編著）「国民作家マーク・トウェインの生成とアメリカ出版ビジネスの成長――予約出版と知的財産権の概念整備」『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化――十九世紀以降にみる英米出版事情』小林英美・中垣恒太郎編（音羽書房鶴見書店、2017 年 5 月）、214-236 頁。
４．中垣恒太郎（分担執筆）「国民作家マーク・トウェイン」『英語教師力アップシリーズ――授業力アップのための英語圏文化・文学の基礎知識』江藤秀一・鈴木章能編（開拓社、2017 年 5 月）178-183 頁。
５．中垣恒太郎（分担執筆）「テレビ文化批評としての映画『トゥルーマン・ショー』――「リアリティＴＶ」・消費文化・1950 年代アメリカ」塚田幸光編『映画とテクノロジー』（ミネルヴァ書房、2015 年 4 月）91-121 頁。
６．中垣恒太郎（共編著）「アメリカン・ロード・ナラティヴとしての『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』――マーク・トウェインの放浪者像と 19 世紀アメリカ文化における交通」『アメリカン・ロードの物語学』松本昇・中垣恒太郎・馬場聡編（金星堂、2015 年 3 月）19-37 頁。
７．中垣恒太郎（分担執筆）「災害文学の想像力――ハリケーン災害表象から見る都市・環境・テクノロジーの政治学」『文学を環境から考える――エコクリティシズムガイドブック』小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江編（勉誠出版、2014 年 11 月）116-34 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
中垣　恒太郎（Kotaro NAKAGAKI）
大東文化大学経済学部教授
研究者番号：８０３５０３９６